

平成30年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、掲示されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が4問で、表紙を除いて10ページです。〔四〕は記述問題です。
- 4 解答用紙の答え方は、おもて面がマークシート方式でうら面が記述式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に解答用紙冊子から解答用紙を切り離し、おもて面とうら面の受験番号を確認後、氏名を決められた欄に書きなさい。
- 6 答えは、それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって、ていねいに記入しなさい。
- 7 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 8 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

三年ほど前、学生のレポートに「精心」という字を見出したときには強い衝撃を受けた。

(a)、この文字はまだ「精神」という語の「誤字」であるということがただちに分かる程度の誤記であった。

去年、学生のレポートに「無純」の文字を見出したときには、(b)、しばらく動悸が鎮まらなかった。それが「精心」とは違う意味での、知的な「地殻変動」の兆候のように思えたからである。

文脈をたどる限り、「無純」の語をこの学生はただしく「矛盾」の意味で用いていた。「むじゅん」ということばの意味をこの学生は理解しているのである。「無純」という文字も、「対立者を含んでいるので」純粋では無い」という解釈によるのであろうから、(c) (d)、デタラメとは言えない。(d)、「むじゅん」という音と、文脈から、「無純」という「当て字」を推理した知的能力はかなり高いと申し上げてもよいくらいだ。

だから問題はむしろ、**I** 能力まで備えた学生が、なお「矛盾」という文字を知らなかった、という点に存するのである。

「無純」が暗示するのは、「知識の不正確さ」とは別の種類の「知識の欠落」が蔓延しつつあるという現実である。

なぜ「矛盾」が書けないのか？

「本や新聞を読まないからだよ」と言つて済ませる人がいる。

A 彼らが愛読する「マンガ」というのは絵と文字のハイブリッド・メディアであり、膨大な量の文字情報をも同時に発信している(だから識字率の低い国では、子どもたちが「マンガさえ読めない」ということが起こるのだ)。

B だが、そうだろうか。

C 実際には、彼らは結構文字を読んでいる。

D それに、彼らが日頃熟読している情報誌やファッション誌もまた少なからず文字情報を含んでいる。

なぜ、これだけ文字に浸つていながら、「文字が読めない」ということが起こるのか。

私の仮説は次のようなものである。

それは彼らが「飛ばし読み」という習慣を過剰に骨肉化させたためである。

私たち人間の知性にはもともと「意味のないノイズ」を無視して、自分にとって意味のあるものだけを選択的に拾つてゆくという「飛ばし読み機能」が備わっている。機械にはこんな芸当はできない。

II 的な表現になるが、人間が機械よりも勝っているのは、機械には拾えない情報を検出することができる点ではなく、機械がいちいち拾ってしまう情報を無視することができる点においてである。

その点では、「文字が読めない」大学生たちの知的構造は^①すぐれて人間的なのだと思はう。

通常、私たちは「自分程度の知的水準の読者を対象としている」と想定されているメディアで、自分の「読めない文字」や「意味の分からない単語」に出会った場合、「ぎくり」とする。文脈から推察できない場合は、人に聞いたり、^②(あとでこっそり)辞書を引いたりして、語義を確定しようとする。そのような「意味の欠如」に反応する不快や欠落感に担保されて私たちの語彙は拡大するのである。

ところが、当今の若者たちの場合は「自分たちの知的水準に合った」メディアに日常的に触れながら、「意味の欠如」を埋めようとする意欲がほとんど発生しない。読めない文字があっても気にならないのである。

どうしてそんなことが起こるのか？
実物に即してご説明しよう。

このイヴェントではワイアー(“アヴァン・ウェイヴ/ポスト・ギャルド・パンクス”―彼等を覚えているかな?)、思い思いに装ったKLF(覚えてる?)、ビル・ドラモンド(100万ポンドを燃やした男!)、起きがけにたつぷりのスコッチを飲むことで有名なSF作家JGバラード、そして最近ではビジン英語を世界的な言語として広めるプロジェクトと腹話術ワークショップで知られる紳士、ケン・キャンベルといった突飛なキャストが集められている。(Paul Bradshaw, Lon-don Calling, 『Meets Regional』二〇

〇三年一月号)

この段落を「すらすらと」読んで、その意味のすべてを理解できなかったのは読者の中にも決して多くはなかったであろう。

^③この引用はやや特殊すぎるけれど、それでも、このような文章ばかりを浴びるように読み続けた場合に、人間は文字情報に対してどのような反応をするようになるのか、ということは容易に想像がつく。それは「意味の分からないことばがあっても、気にしない」という反応である。「覚えてるかい?」というポール・ブラッドショウの親しげな呼びかけが暗示しているように、この文章が読者に求めているのは、ちょうど英語のヒットソングを(歌詞の意味が分からなくても)愉^{たの}しむのと同じように、「ノリのよい文章を読んで、気分がよくなること」である。

「単語一つ一つの意味なんか、どうだっていいじゃないか」書き手だつてそう思っているのである。

書く側読む側に共有されているこのような「テキスト(文章) 音楽」的な受容態度が、「今どきの若者のリテラシー^(注2)に初期設定として組み込まれている『飛ばし読み』機能」を形成する心理的土壌をなしていると私は考えている。

同じことはスタッフのあいだでしか通じない意味不明の「内輪ギヤグ」を平然と放送するバラエティー番組についても言えるだろう。いわばメディアはほとんど意図的に「虫食い算」のようなかたちで情報を供与しているのである。そして、メッセージの受け手がその

「意味の虫食い部分」について、「え？いま何て言ったの？」と逐語的に反応するのは「みっともないこと」だとされているのである。

いまの若者が目にし、耳にする日本語の文章は、あまりに多くの「意味不明のことば」を含んでいる。そして、読者視聴者に期待されているのは、その逐語的理解ではなく、文章の持つグルーヴ感やテンションに同調して「乗る」ことなのである。

おそらくはそのようにして「無純」と書く大学生は誕生したのであると私は思う。
（内田樹「ためらいの倫理学」から）

(注1) ハイブリッド⇨異なる要素を掛け合わせたもの

(注2) リテラシー⇨読み書きの能力

(注3) 逐語的に⇨一語一語ごとの意味をたどるように

(注4) グルーヴ感⇨ノリノリよさ、一体感などを指す表現

問一 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして

て適当なものほどれか。

- ア 「a」だが b さすがに c 決して d むしろ
- イ 「a」むしろ b さすがに c だが d 決して
- ウ 「a」だが b むしろ c さすがに d 決して
- エ 「a」むしろ b 決して c だが d さすがに

問二

I に入る語として適当なものほどれか。

- ア 違いを気にせず再現する イ 文脈を的確に推理する
- ウ 語義を理解し造語する エ 背景を類推し真似する

問三 本文中の A から D の文を正しい順序に並びかえたものはどれか。

ア	「 B 」	↓	「 D 」	↓	「 C 」	↓	「 A 」
イ	「 B 」	↓	「 C 」	↓	「 A 」	↓	「 D 」
ウ	「 C 」	↓	「 D 」	↓	「 A 」	↓	「 B 」
エ	「 C 」	↓	「 A 」	↓	「 D 」	↓	「 B 」

問四

II に入る語として適当なものほどれか。

- ア 抽象 イ 消極 ウ 逆説 エ 主観

問五 ① すぐれて人間的とあるが、その説明として適当なものほどれか。

- ア 読めない文字はためらうことなく読み飛ばして、まったく気にしないということ
- イ 読めるふりをせずに、読めないものは読めないと正直に表明しているということ
- ウ とるに足りない情報はあえて無視をしようと常に心がけて読んでいるということ
- エ 読めていない文字も読めていると思ひ込むことができるということ

問六

② そのような……拡大するとあるが、その説明として適当なものほどれか。

ア 文字や単語が理解できないという不安や焦りを解消するため
に単語の意味を調べることを通して、それらの語義を正確に把握し、使えるものとしていくこと

イ 知的水準が低いという周囲からの指摘に反発して、自分たちの高い知識レベルを示すために、人はあえて難しい単語や語句を身につけていくということ

ウ 人は理解できない単語や語句に遭遇すると文脈からその意味を推測するものなので、正確な意味の把握ができていなくても自然と文意を理解する力が身につけていくということ

エ 理解できない単語があっても気にせずに文章を読み進める「飛ばし読み機能」の効果で、正確さには欠けるがそれなりに使える言葉が増えていくということ

問七^③ この引用はやや特殊すぎるとあるが、その理由として最も適当なものとはどれか。

ア 若者の語彙力不足の問題を指摘することを目的とするにはあまりにも異質な文章だから

イ 特定のファンだけを対象としていて、一般の読者が読むことなど最初から想定していない文章だから

ウ 単語の意味など関係ないという文章が多くなっている中에서도りわけ意味不明の用語であふれた文章だから

エ 筆者でさえ理解できた語がほとんどないような、一般の読者にはあまりにも高度な語彙力を要求する文章だから

問八^④ 「テキスト（文章）⇨音楽」的な受容態度とあるが、その説明として適当なものとはどれか。

ア 一方的に奏でられる音楽を理解しようとするように、意味不明の単語をなんとか受け止めようとするような態度

イ メロディーに身を委ねるのではなく、歌詞からリズムやテンポを見いだそうとするような態度

ウ 譜面に記された音符や記号を忠実になぞるように、すべての文字を丁寧に追って読むような態度

エ 文字から意味を読み取るのではなく、音楽を聴くように感覚や気分で味わって満足するような態度

問九^⑤ そのようにして「無純」と書く大学生は誕生したとあるが、その原因として本文に挙げられていないものはどれか。

ア 「意味の欠如」を気にとめずに読み飛ばす若者の姿勢

イ メディアによる「虫食い算」のような情報の供与

ウ 意味のないノイズを無視する機能の消失

エ 読者視聴者によせられる文章に「乗る」ことへの期待

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「僕」は予備校で知り合った「F君」に誘われて、彼の家の別荘があるK高原を訪れ、しばらく滞在するつもりでいた。そんなある日、「F君」の提案で近所の人たちも誘ってA牧場までハイキングに行くことになった。

僕はワイシャツの下に、「途中で暑くなるから、この方がいいだろう。」と、すすめられるままに恰好かっこうのことも何も気にせず、F君の半ズボンをはいて出てきたのだが、何しろ胴まわりメートル六十センチのF君のズボンでは、単に僕の腰に（ a ）とまつわりついているだけの、きわめて取りとめのないスカートか何かのようしか見えないのだ。「ちょっと待ってくれ。せめて僕は自分のズボンとはきかえてくるよ。」「何を云いっているのだ。男のくせに身なりにかまうのはよせ。もう集合の時間だから、そんなことを云いつたって間に合わないからだめだ。……うん、なかなかユニークで、かえて味のあるスタイルじゃないか。」F君は自分のズボンに文句をつけられたことが気に食わなそうな様子もあり、しかたなく僕はその恰好のまま、はなやかな一行の行列に加わった。実際、僕は口もきけないぐらい憂鬱ゆううつだった。一行の僕以外の人たちは、すくなくとも顔見知り程度にはおたがいに知り合っており、F君もあたりの人と冗談口をききあったりしているが、僕にはとてもその仲間に入って

いくだけの勇氣はなかった。足を動かしていることでやっと孤独にたえながら僕は、^①ともかく無心に歩きつづけていたのだ。ところが、そうやって無心な歩き方をしている僕に思わぬ不幸が見舞ってきた。羊歯じょうしや雑草にかこまれて（ b ）した朽葉くちはにおおわれた小径こみちにさしかかったときだった。僕の片足が突然、草むらの中に吸い込まれたと思う瞬間、目の前が黄色くなった。ハチであった。地蜂の巣を僕が踏みつけたのであった。百足ひゃくすい以上のハチが一行におそいかかってきたのであった。「誰だ、ハチの巣を踏むなんて、間抜けな野郎は！」ハチ退治に奮戦した学生のなかから、そんな声がかかるのも聞こえる。その張本人が僕であることは誰の眼からも明らかだった。A牧場までの道はなかなか遠かった。だが、^②何が幸福のチャンスをつかむキツカケになるのかわからないものだ。一団になって歩いている一行をほとんど見失わないばかりに遠くおくれ、ゆるい峠の道を一人で上がっていると前に一人、黄色いワンピースを着た十八ぐらいの少女が、やつぱり列からおくれて、だるそうな足どりで歩いていった。脚のフクラハギをハンカチでしばっているのが目についた。あ、彼女もハチに刺された組だ。そう思うと僕は、ほとんど反射的に逃げ出そうとした。そのとき彼女はふり向いた。そして思いがけない打ちとけた様子で、僕にも水筒の水で濡ぬらしたハンカチを脚に巻くようにすすめた。僕の脚はハンカチの一枚や二枚では到底つつみ切れないほど、あちらこちらほとんど脚全体がはれ上がっていたのだが、あえて彼女のすすめにしがった。そうすることによって僕の恰好は一層見苦しくなるだろうとは思ったが、^③彼女の

やさしさに僕は一種犠牲的な精神を發揮したつもりだった。けれども実のところ、そんなことよりもその少女には身なりのことなどでは人に屈託をあたえない何かがあったのだ。^④僕は不意にページを開けて、いままでとはまったく違ったところを読み出したような気になった。

A牧場では一行が僕らを待っていた。僕は牧場らしいものがモヤのような小雨につつまれて見えはじめたとき、つかの間夢が醒めて行くような気持がした。——これで僕の護衛の役目もすんだわけだ。あそこにはもう僕ら二人の世界はなく、僕はまたもとどおり奇怪なズボンからよつきり出した腫れ上がった脚をみんなから眺められることになる、と。ところが、おどろいたことに牧場に到着しても少女は一向、僕のそばからはなれて行こうとはしなかった。F君は小屋の中の板貼りのテーブルで、一人でミルクをのんでいた。僕が彼女をつれてはいつていくとF君は不機嫌そうにコップを口におしつけながら、だまって僕らの方を見た。しかしすぐ機嫌をなおすと僕ら二人をさそってコリー種の仔犬のいるところへ案内した。そして休憩時間いっぱい犬と遊んで帰りのバスまで三人いっしょであった。夕暮れてくる停留場で別荘行きのバスを待ちながら僕は思った。ともかくきょうは楽しい一日だった。ただ、そんなに満足すべき一日が暮れようとしているのに、どうしてこんなに心のこりがするのだろう。いくら考えても僕には、その心のこりが何であるのか考えつかなかった。いまは彼女はF君ともへだてのない口をききあつて無心に遊んでいる。「君、体操が得意なら、あの木の枝にぶら下られ

るかい。」とF君がいう。「できるさ。」彼女はそう答えるがはやいか、垂平な枝をのぼしている高い木にとびついて、両脚で空中に半円をえがくと、そのまま体をさかさまにして木の枝にぶら下がった。スカートを無造作にめくり上がらせた彼女のシルエットが夕日を背にして（c）うかびあがるのをみながら、僕はふと、（明日は東京へかえろう）と思い立った。予定どおりその翌日、K高原を引き上げたので僕は、ついに少女の名前も何も知りえなかった。

秋おそく、友人たちと上野へ展覧会を見に行ったとき、トークをかぶった少女にすれちがって、あ、あの時の彼女だな、と思いながら僕がふり向くと彼女も同時に僕を見た。きつと彼女にちがいない。けれども僕らはそのまま別れた。だが、美術館を出ると同時に僕は急に彼女が恋しくなった。それはいままでになくハッキリした恋情だった。美術館前の芝生にむらがった人々のなかに、あてもなく彼女の姿をもとめてみると、その可能性がなさそうだと思うにつけて、^⑤ますます無性に会いたくなつた。「そうだ！僕は咄嗟に思いつくと、いきなり芝生の上で逆立ちをした。僕の芸当に友人たちはアツケにとられていた。いつか僕の逆立ちのまわりには人々が円くとりまいていた。そうでなくともノボセ上がっていた僕の頭は、血が下がってますます（d）してしまい、いまはただ少しでも長くがんばって立っていることに気力をふるいたてながら、天と地と逆さまにうつった群衆に眼を放っているのであった。

（安岡章太郎「逆立」から）

(注) トークII浅い円筒形をした、つばのない婦人帽

問一 () a () から () d () に入る語の組み合わせと

して適当なものほどれか。

- ア 「a フワフワ b ボンヤリ c ジメジメ d クツキリ」
イ 「a フワフワ b ジメジメ c クツキリ d ボンヤリ」
ウ 「a ボンヤリ b フワフワ c クツキリ d ジメジメ」
エ 「a ボンヤリ b クツキリ c フワフワ d ジメジメ」

問二 僕は、^①ともかく無心に歩きつづけていたのだ。とあるが、そ

の時の「僕」の様子として最も適当なものほどれか。

- ア 面識のない人たちに溶け込む自信がないため、うつむきがち
になってしまっている。
イ 知らない場所に自分だけが取り残される不安に襲われ、必死
にみんなについていこうとしている。

- ウ 情けない恰好を初対面の人たちに見られないように、速足で
歩いてみじめな状況から一刻も早く抜け出そうとしている。
エ 気おくれする心を紛らわすために、ひたすら自分の足に意識
を集めている。

問三 何が……わからないものだ。^②とあるが、この時に「僕」の

感じた「幸福」の具体的な内容として適当なものほどれか。

- ア ハチの巣を踏んだ犯人であることを隠すことができたこと

- イ 見ず知らずの人と無理やり会話をしなくても済んだこと
ウ 短い時間ながらも「少女」と二人だけでいられたこと
エ 脚がはれ上がってしまった恥ずかしさを忘れていられたこと

問四 彼女のやさしさに……^③つもりだった。とあるが、その説明

として適当なものほどれか。

- ア さらにおかしな姿になるので嫌だったが、彼女の思いやりに
報いるために我慢して彼女のすすめに従ったということ

- イ ハンカチを巻いても痛みは軽くないが、ハチに刺された

- 者同士という仲間意識から彼女のすすめに従ったということ

- ウ 自分のせいで彼女がハチに刺されたという負い目があるので、

- 彼女のすすめを断れなかったということ

- エ 自分の失態を責めずに気遣ってくれたことに感動し、彼女

- のすすめを断れなかったということ

問五 屈託をあたえない、^④へだてのないの本文中での意味の組み合

わせとして適当なものほどれか。

- ア 「^④ 落胆させない ^⑥ 差別のない」

- イ 「^④ 評価をさせない ^⑥ ためらいのない」

- ウ 「^④ 不快感を持たせない ^⑥ 気取りのない」

- エ 「^④ 気にさせない ^⑥ 遠慮のない」

問六 ⑤ 僕は不意に……：……気になった。とあるが、その説明として最も適当なものはどれか。

ア 捉えどころのない相手の言動が理解できず、すっかり戸惑ってしまったということ

イ 今までに感じたことのないような、新鮮な気分になわかに一変したということ

ウ 初対面なのに優しい言葉をかけてもらい、少しずつうれしさがこみあげてきたということ

エ 身なりを気にしていた自分がなんとなく恥ずかしくなったということ

問七 ⑦ 僕はふと、……：……思い立った。とあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア 「F君」と仲良く遊んでいる彼女の様子を見て、自分が失恋したことを受け入れようとしたから

イ 周りの目を気にせずに「F君」と遊ぶ彼女の様子を見て、急に彼女への気持ち冷めてしまったから

ウ 仲睦まじく二人で遊んでいる様子を見ているうちに、「F君」への嫉妬心が芽生えてきたから

エ 「F君」と無邪気に遊んでいる彼女の姿を見て、自分と彼女だけの時間が終わったことを実感したから

問八 ⑧ いきなり芝生の上で逆立ちをした。とあるが、その時の「僕」の様子として最も適当なものはどれか。

ア 二度と会えない「少女」を忘れようと努力している。

イ 「少女」への恋心を友人に悟られないようにごまかしている。

ウ かつての「少女」の行為を真似て少女への思いにひたっている。

エ 何とかして「少女」に気づいてもらえるように必死になっている。

問九 「少女」の人物像として最も適当なものはどれか。

ア 細かいことを気にしない、明朗で活動的な少女

イ 大胆な中に繊細な面も感じられる少女

ウ 態度が次々と変化する、捉えどころのない少女

エ 行動がおおげさで荒々しい感じのする少女

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

源高明(注1) (大臣) の屋敷では、毎夜、柱の節穴から、小さい子供の手が出て人を手招きするという怪異が起きていた。

大臣(オ聞きニナツテ) これを聞き給ひて、いとあさましく怪しび驚きて、その穴の上に経を結び付け奉りたりけれども、なほ招きければ、仏(仏ノ絵像ヲオ掛ケ申シ上ゲタケレドモ) を懸け奉りたりけれども招く事なほ止まざりけり。かく様にすれども敢へて止まらず。しかる間、ある人また試みむと思ひて、征箭(注2) を一筋その穴に差し入れたりければ、征箭のありける限りは招く事無かりける。
これを思ふに、心得ぬ事なり。定めて者の靈などのする事にこそはありけめ。それに、「征箭の験仏教に勝り奉りて恐むやは。」と人皆これを聞きてかくなむ怪しび疑ひける。(「今昔物語集」から)
(注1) 源高明(みまものたかあき) 醍醐天皇の子で、西宮左大臣と呼ばれた
(注2) 征箭(せいやん) 戦陣に用いる四枚羽のとがり矢

問一 (a) なほ、(b) 定めての本文中での意味はそれぞれどれか。

- ア やはり
- イ なかなか
- ウ なおさら
- エ 思いのほか
- (2) (b) 定めて
- ア あるいは
- イ むしろ
- ウ もしかすると
- エ きつと

問二 奉り(たご) という謙讓語の敬意の方向として適当なものはどれか。

- (例) 私は先生に本を差し上げた。：「私」から「先生」
- ア 「大臣」から「経」
- イ 「語り手」から「経」
- ウ 「大臣」から「手」
- エ 「語り手」から「大臣」

問三 ② しかる間の説明として最も適当なものはどれか。

- ア 手が昼夜かまわず手招きしている間
- イ 様々な怪異が起こり続けている間
- ウ 怪異がおさまらないでいる間
- エ 小さな子供がいたずらをしている間

問四 ③ これが指している内容として最も適当なものはどれか。

- ア 経や仏の力でもおさまらない怪異を、征箭でおさめようとした人がいたこと
- イ 経や仏の力でもおさまらなかった怪異が、征箭の力でおさまったこと
- ウ 征箭の力を、経や仏の力と同じくらい霊が恐れているということ
- エ 征箭の力が、経や仏の力に勝っていることに誰も気がつかなかったこと

問五 ④ めの活用形として適当なものはどれか。

- ア 未然形
- イ 已然形
- ウ 終止形
- エ 連体形

四

次の文章と【資料】を読んで、後の問いに答えよ。

※問五の問題の都合上、【資料】の中には、一か所誤字がある。

自分の魅力や特徴をわかりやすく印象的に相手に伝えることを自己PRという。自己PRを書く際には、まず、自分の特徴(長所)の中で、特にアピールしたいことを考えてみよう。特徴については、それを裏づける経験(事実・出来事)を振り返ってみるとよい。そして、その経験から何を学んだのか、何を身につけたのかを考察しよう。それらを短くまとめたものがキャッチフレーズになる。

↑印象深い自己PRにするためには…

(例)・具体的で強い印象を与えるエピソードを、冒頭に置く。^(a)

・力強いキャッチフレーズを冒頭に置き、相手を引きつける。

・キャッチフレーズを末尾において、余韻を残す。^(b)^(c)

【資料】

② 「心のやり投げ金メダル!」、それが私です。私は小さい頃から祖母と話をするのが好きでした。知らないことをたくさん知ることができ、話しているとても温かい気持ちになるからです。高校に入学した後は、機械があることに特別養護老人ホームへボランティアに行くようになりました。③ 最初は、お年寄りへの接し方にとまどうことも多かったのですが、相手のことを考えて「思いやり」を持って接していると、少しずつ、よい関係が作れるようになりまし。そのような経験から、どんな人にも、「思いやり」

を持つて接することが大切だと思うようになりました。相手のことを考えて行動したり、話をしたりすることに関しては、誰にも負けないと思っています。だから「思いやり」という「心のやり」を投げさせたら金メダル間違いなしです。

問一 冒頭、末尾、余韻、の読みをひらがなで書きなさい。^(a)^(b)^(c)

問二 それらが指しているものを説明した次の文の空欄に入る内容を十五字以内で答えなさい。^①

特徴を裏づける経験から「」。

問三 「心のやり投げ金メダル!」、それが私です。という部分には、^②

自己PRを書く上でのどのような工夫がほどこされているか。解答欄の「工夫」につながる部分を、本文中から探し、その最初と最後の三字をそれぞれ抜き出さない。

問四 最初は、……になりました。という一文の、文の種類を漢字で答えなさい。^③

問五 【資料】の中から誤字を見つけ、正しい漢字に直さない。

(例) 誤…工作 ↓ 正…耕作

